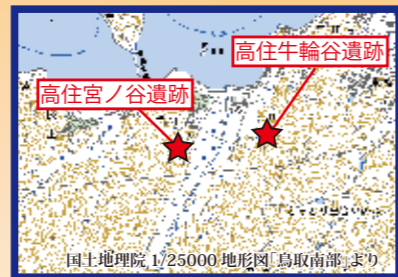


高住宮ノ谷遺跡 たかすみみやのたにいせき & 高住牛輪谷遺跡 たかすみうしわだにいせき

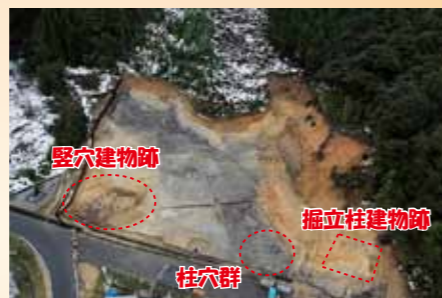


発掘調査が終わりました！

高住宮ノ谷遺跡、高住牛輪谷遺跡とも、12月に今年度の発掘調査が無事終わりました。調査にご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました。

一番の調査成果は、両遺跡とも、古墳時代の終わりごろ（約1,400年前）を中心に、小さな集落が営まれていたのが分かったことです。高住宮ノ谷遺跡では、^{たて}竪穴建物跡や^{ほったてばしら}掘立柱建物跡が見つかり、集落の具体的な姿をかなり明らかにできました。高住牛輪谷遺跡では集落の全体像はつかめませんでしたが、建物を建てる前に大規模な造成工事をしていたことが分かりました。

これから、出土した遺物の整理を行っていきます。発掘中には気づかなかった、新たな発見があるかもしれません！！

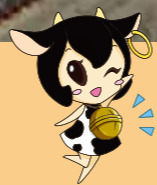


高住宮ノ谷遺跡の全景
(東側上空から撮影)
古墳時代の終わりから古代の初めにかけてつくられた、竪穴建物跡2棟と大型の掘立柱建物跡1棟のほか、たくさんの柱穴が見つかりました。

高住牛輪谷遺跡の全景
(北西側上空から撮影)
古墳時代の終わりごろに、谷の大部分を埋める大規模な造成が行われています。造成面からは、建物の一部と考えられる柱穴が見つかりました。



←高住宮ノ谷遺跡、調査最終盤の作業風景。遺跡内の雪かきをしています…(T_T)。



鳥取西道路の遺跡を掘る！

第69号 2015年1月23日

あけましておめでとうございます！
お正月、みなさんはお雑煮を食べられましたか？
今回は、お雑煮やお味噌汁を入れたりと私たち日本人になじみの深い、漆器のお椀についてのお話です。



漆器のお椀の今昔

現在私たちが目にする漆器には、料亭で出されるような高級品から、100円ショップで買えるプラスチック製の模造品までありますよね。今回はそんな漆器のお椀の歴史をふりかえってみましょう。

奈良時代から平安時代の初めごろ、漆器は高級品とされ、貴族など位の高い人々だけが使うことのできる特別なものでした。お椀の作り方は、木を加工して成形したものに下地を塗り、その上に漆を塗り重ねますが、このころは下地に漆を使い、上塗りの漆も3～4回塗り重ねられていました。

平安時代の後期になって、下地は柿渋に炭の粉を混ぜたものを使い、漆の上塗りも1～2回に減らした簡単なつくりの漆器が現れます。そのおかげで低コストの漆器を量産することができたので、上流階級以外の人々も漆器のお椀を持つことができるようになったのです。

下坂本清合遺跡では、鎌倉時代ごろ（約800年前）の川の跡や水場から70点以上の漆器がみつかり、当時の流行だった黒地に赤い模様を描いたお椀が目立ちます（写真1）。また、少し新しい時期と考えられるお墓の穴からみつかった漆器（『鳥取西道路の遺跡を掘る！』第64号）には、亀甲の模様がスタンプで押されています（写真2）。スタンプを使い、製作の手間をはぶくという工夫が、鎌倉時代の漆器の普及に一役買っているのです。

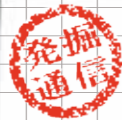
英語でjapanと呼ばれる漆器。ふだん使うお椀はプラスチック製のものであっても、せめてお正月くらいは本物の漆器のお椀でお雑煮を食べたいものですね^^



写真1 花の模様が描かれたお椀



写真2 スタンプで押された3つの亀甲紋



まだまだ寒い季節が続きますが、本誌ではホットな情報をどんどんお伝えしていきます。また、ホームページでも調査の成果を発信していますのでお見逃しなく！

今年も鳥取県教育文化財団調査室を、よろしくお願ひします！

鳥取県教育文化財団 調査室

(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12番地

TEL: 0857-51-7553 FAX: 0857-51-7550

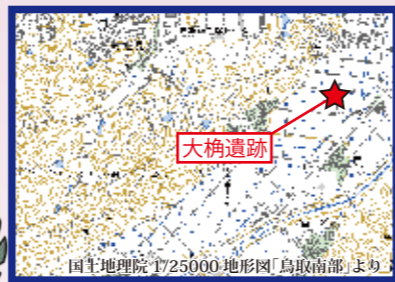
メールアドレス: tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP: http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm



大楠遺跡

だいかいせき



古墳時代のムラあらわる！！

現在1-1区では、古墳時代（約1,600年前）の地面を調査しています。地層断面の様子からも古墳時代の遺構が多いことはある程度つかめていたので、展開としては予想通りでしたが、古墳時代のムラがバッチリとその姿をあらわしました。

調査区の北西部分はやや高い地形になっており、そこを中心として建物やゴミ捨ての穴がみつかります。一方、調査区の南側は低く平らな土地が広がっていたようで、田んぼの跡やおまつりの道具がたくさん捨てられていた川がみつかりました。

大楠遺跡の西側に広がる丘陵には、里仁古墳群や楠間古墳群といった、古墳時代前期から中期にかけての大規模な古墳群が広がっています。こうした古墳を造営した人たちが住んでいた場所だったのでしょうか。



古墳時代の川、田んぼや川ほとあった低い土地、馬の頭の骨もみつかりました、古墳時代のムラを北からみた様子、ゴミがたくさん捨てられていた穴、古墳時代の建物（竪穴住居）

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



古代の人たちが身に着けたアクセサリー！

昨年の9月で調査が終了した2区では、第63号で紹介したガラス製勾玉（写真1）のほかにも、ヒスイ製勾玉（写真2）が出土しました。弥生時代のもので、大きさは、縦1.2cm、横0.9cm、厚さ0.3cmほどです。孔は、片面から穿孔してありました。これは、勾玉の孔の大きさが、片面だけ小さいことからわかります。今回の調査で見つかったのは1点のみですが、これまでの周辺の調査でも出土しています。

みつかった勾玉は、アクセサリー（装身具）として身につけるために、素材となる硬いヒスイを、丁寧に磨いて仕上げられています。日本の遺跡から出土するヒスイは、ほとんどが新潟県の糸魚川産のものです。

古代の人々は、ヒスイやきれいな色のガラスで作られた勾玉に、特別な思いを込めていたのかもしれません。



写真1 松原田中遺跡出土ガラス製勾玉



写真2 松原田中遺跡出土ヒスイ製勾玉

常松大谷遺跡 & 常松菅田遺跡

つねまつおおたにいせき & つねまつすがたいせき



カマド大变身！



写真1 現場ではたくさんの遺物が集中して出土

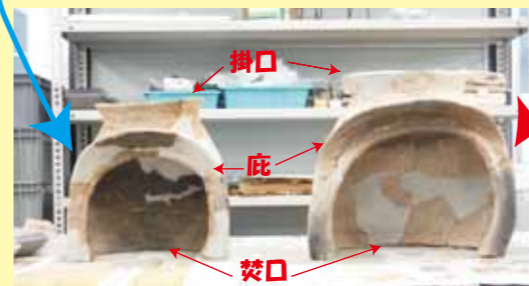


写真2 接合を終え、ほとんど完全な形になった竈

常松大谷遺跡では、現在屋内で「注記」と「接合」という作業を主に行っています。「注記」とは、出土した土器などに遺跡名や出土した年月日などを、できるだけ小さな字で書き込むことです。そして、この注記した土器同士をパズルのようにつけていくのが「接合」という作業です。

さて、写真1の場所から見つかった土器を接合していくと、赤線・青線に囲まれた土器が、煮炊きするとき使用された移動式竈であることがわかりました。竈は、大きなものと小さなものがあり、どちらもほとんど完全な形に復元できました（写真2）。両方とも、煮炊きに用いる甕を置くための掛口、薪などを入れて火加減を調整する焚口があります。その上、火が消えないようにするために、庇をつけていることもわかりました。

ところで、土器が集中して出土した近くには竪穴建物が1棟あったので、これらの竈は建物に住んでいた人が捨てたのかもしれない。昔の人は1棟で2つの竈を使っていたのでしょうか？

下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき

手に汗握る、調査終盤！！

調査も最終盤にさしかかった12月15日（月）、発掘調査現場に行った私たち担当者は、そこで途方に暮れてしまいました…。右上の写真がその様子です。前日までに降り積もった雪が調査区全体を白く覆ってしまっていたのです。

あと1週間以内に、雪のない状態でラジコンヘリコプターによる調査区全体の写真撮影を行わないと年内の調査終了日に間に合いません。



12月22日撮影の全景写真



雪に覆われた調査区（12月15日）

どのような作戦で写真撮影に向かうか、悩んだ末とにかくギリギリまで雪が解けるのを待ってみることにしました。

担当者の懸命の祈りが通じたのか、撮影予定日の12月22日までに見事に雪が解け、なんとか最後の写真撮影を行い（左下写真）、無事調査を終了させることができました。

このように、調査を順調に進めるためには、天も味方（？）につけなければなりません。

来年度は水ごりが必要かも？